掲載日：2021年06月07日，面名：S206X0，記事ID：K2021060700000003800
(C)河北新報社

震災伝える中核施設に

石巻 津波伝承館開館

石巻市の石巻南浜津波復興祈念公園内の「みやぎ東日本大震災津波伝承館」が6日、開館した。祈りの場として整備された一帯の中核的施設として震災の記憶と教訓を後世に伝える。

津波の恐ろしさや避難することの大切さを記録映像で訴えるシアター「くり返さないために」を設置。津波被害や復興の歩みなどを示すパネル展示や、被災者らのインタビュー映像の視聴コーナーもある。

開館と同時に地域住民ら約40人が来館。地元町内会の本間英一会長(71)は「すっきりした展示で内容も分かりやすい」と話した。

開館に先立つ式典には関係者ら約60人が出席。市民団体事務局長の黒沢健一さん(50)が講演した。

黒沢さんは震災1カ月後、津波で流失した市内の店舗兼自宅跡地に「がんばろう！石巻」の看板を建てた経緯を紹介。「絶望しかないがれきの海で希望のメッセージを掲げたかった」と振り返った。

伝承館は屋内直径が約40㍍のガラス張り鉄骨平屋、延べ床面積約1300平方㍍。国が建設し、展示物は宮城県が管理運営する。公園が開園した3月28日に開館予定だったが、新型コロナウイルスの影響で延期していた。岩手、宮城、福島の被災3県が運営する震災伝承施設の中で最後の開館となった。

津波の恐ろしさを伝えるパネル展示に見入る来館者

土地の記憶 語り継ぐ

自宅被災 解説員の草島さん

6日開館した津波伝承館では、震災で甚大な被害を受けた地元の石巻市南浜・門脇地区の元住民も解説員を務める。「ここに住んでいた人たちの思いを伝えることで本当の伝承につながる」。地区で自宅を失った草島真人さん(61)＝石巻市＝は決意を込める。

震災前、南浜・門脇地区には旧市立病院や旧石巻文化センターが立ち、約4800人が暮らす住宅街が広がっていた。草島さんは「誰もが安心できる日常があった」と振り返る。

震災で死者・行方不明者が500人以上に達した。がれきで覆われた地区に今年3月、38・8㌶の広大な石巻南浜津波復興祈念公園が開園した。かつての自宅があった一画は植樹エリアに。「公園一帯はきれいになったが、ここでたくさんの命が奪われ、人々の人生が変わってしまった」との思いが消えない。

あの日は地震直後、海から約200㍍離れた自宅に戻った。海側で家々が消えるのを見て車に飛び乗り、バックで逆方向に逃げた。車から降り、高台の日和山地区に駆け上がって難を逃れた。

2011年10月、市内の震災伝承グループに加わり、被災体験を語ってきた。多くの犠牲者が出たことに対して運良く助かった自身への負い目もあり、伝承館の解説員を引き受けた。

公園整備で地区住民は散り散りになり、同僚の解説員には当時の街の息遣いを知る人が少ない。「多くの人が生まれ育った土地の記憶を語り継ぐことが自分の役割」。草島さんはそう言い聞かせる。

来館者に展示内容を説明する草島さん（左）